

◆ 随筆 ◆

卒業文集に見るわが高校時代の山

西本 武志

■ はじめに

(1) 以下は、私の出身高校（東京都立豊島高校定時制）の卒業文集『足跡』（一九六〇年三月）に収録された小生の「谷川連峰縦走記」です。しかしその『足跡』が発刊されたこと自体、忘却の彼方でしたので、実際に実物と対面したときはびっくり仰天。思わずわが両の眼をこすってしまいました。

『縦走記』にもしばしば登場する、井口清（高校時代の登山のパートナーで、現在も親しい間柄）がさる日、「珍しい物を見せてやるよ」と『足跡』を携えて

来宅しなかったら、

恐らく永遠に失念のままだったでしょう。持つべきものは友”を、しみじみ実感したしだいです。



(2) 謄写版刷（ガリ版刷）の原本は長い時空を経たためか、色あせて読みづらい上に、表現の仕方や句読点、改行その他に適當を欠く部分が目につきます。けれども、明らかな誤字・脱字以外は手を加える（校正の朱を入れる）ことは一切しませんでした。執筆当時の気分を少しでも残しておきたいと思ったからです。

(3) 高校時代を振り返ってみると、第一次登山ブーム——一九五六年五月九日、日本隊（槇有恒隊長）が八一九六峰に初登頂したことで起こった、いわゆるマナスルブーム——に触発された勤労者層が、どっと登山の世界に進出し、三人寄れば山岳会といったフレイズと實際行動が広まるに至ります。同時に大学山岳部を中心に遭難事故も多発します。

そして北ア前穂高東壁で起きた三重県鈴鹿市・岩稜会によるナイロンザイル切断事故（一九五五年一月）をモチーフにした、井上靖の新聞小説『氷壁』の連載

(朝日新聞、一九五六年二月〜一九五七年八月)や、その映画化(一九五八年)も登山ブームに拍車をかけ、優れた記録を次々に打ち立てる勤労登攀者も現れました。

(4) 時あたかも、安保大闘争の真つ只中。黒板に向かう教師たちの胸に「安保反対!」と記した小さな黄色いリボンが見え隠れしていたのをかすかに覚えています。高校卒業後、わたしも安保のデモの波に加わるようになります。

他方、わたしたちが現役時代の同校山岳部員は生活費を切り詰めては、東京近郊の山歩きにいそしむかわら、内外の山の映画を見にいったりしたように思います。カネのかかるアルプス山行などは、文字どおり「高嶺の花」。四年間でたった二度、北ア・燕岳と南ア・仙丈ヶ岳を訪れただけでした。

「谷川連峰縦走記」は、お世辞にもレベルを云々できる域にも達しておらず何の参考にもなりません、ご一読いただければ、とにかく懸命に山に登ろうとがんばっていた定時制(夜間)高校生の「足跡」が少しはご理解いただけるのではないでしょうか。お目汚しいただければ幸いです。

■谷川連峰縦走記

七月三十一日(金) 上野発二十二時発、八月一日二時四十七分土合着、冷気を胸いつぱいに吸い込む。今日の快晴終を約するかのように満天星が無数に散らばっている。多勢の登山客がぞろぞろとあけやらぬ駅の構内を歩んでゆく。同行の井口と私は駅にひと休みしながら食パンを二切ればかり食う。

食欲なし。三時半我々は水を水筒につめ、ライトと地図と磁石とを点検し出発。警備隊本部にてコース予定を記入する。やがて私達はライトで足もとを照らし土合橋を左に見送り東黒沢を渡渉し白毛門山への急な尾根に取付いた。最初から非常な急登でアルバイトを強要される。三十分も登ると二人ともアゴを出しひと休みする。そのころより東の空が白みはじめ左方マチガ沢の岩壁とその雪渓の姿をおしげなく私達の前にあらわし始めた。元氣をとり戻し出発。シャクナゲ、ブナ、ヒノキなどの合成林の道をゆく。しばらくすると今度はマチガ沢に続く一の倉沢の大岩壁がその陰惨な姿を現した。しばらくぼう然とその姿にみいる。井口はシャッターを切っている。去年私が第二ルンゼとBルンゼを登ったときより雪がだいぶ少ない。五時三〇分、ニギリ飯にて早めの朝食をとる。右に白毛門沢の大滝がみえる。夜行列車の疲れが今頃出てきた。非常にねむし。六時出発。キスリングが重く感じら

れ調子悪し。白毛門着八時。予定より遅いが早く出発したため助かる。ゆくてにはやわらかな山容の大倉山・朝日岳が大きく広がっている。そして私達を招く。白毛門を下りきるところ水を飲み干し、沢におりて補給する。もう夕方まで水はあるまい。センベイをかじりつつ大倉山に歩を続ける。ニッコウキスゲや名の知らない可憐な植物とウグイスの美しい声に慰められつつ山頂に着いた。

一の倉が驚くほど近く、そのかわいた岩肌を大気にさらし私達を圧倒する。大倉山頂は高山植物がさき乱れた感じの良い頂きであった。尾瀬、日光の連山が雄大な入道雲の彼方にのぞむことができる。又左には谷川岳、一の倉岳、茂倉岳、武能岳などの連山が私達二人を手招きしている。コウリザトウとセンベイで水を一口のみ大倉山頂をあとにした。私達は右にルートをとって笠ヶ岳へのやせた稜線をたどる。左方の谷側から灌木帯をとうしてガスと共に冷気が酷暑から私達をなぐさめてくれる。麦わら帽を用意してこなかったことを心から後悔する。左方には清水峠の小屋が黒く、東に左曲した山波の頂にはヨモギ峠小屋白く対照物に見えて元氣回復。

笠ヶ岳着十一時三十分。大倉山よりはるかにひろい頂で異なつた植物がさいていた。そして感心したこと、は、池塘という池が方々にあることである。池の中に

は五六匹オタマジャクシがのんびり遊んでいた。私達はここで昼食をとる。井口の旺盛な食欲には驚く。山頂直下四十メートル位のところに水場があり二人で狂喜して冷たい水を心ゆくまでのむ。うまし本当にうまし。時間が早いのでここで昼寝することに決め、キスリングをまくらに横になるとたちまちねこんでしまった。

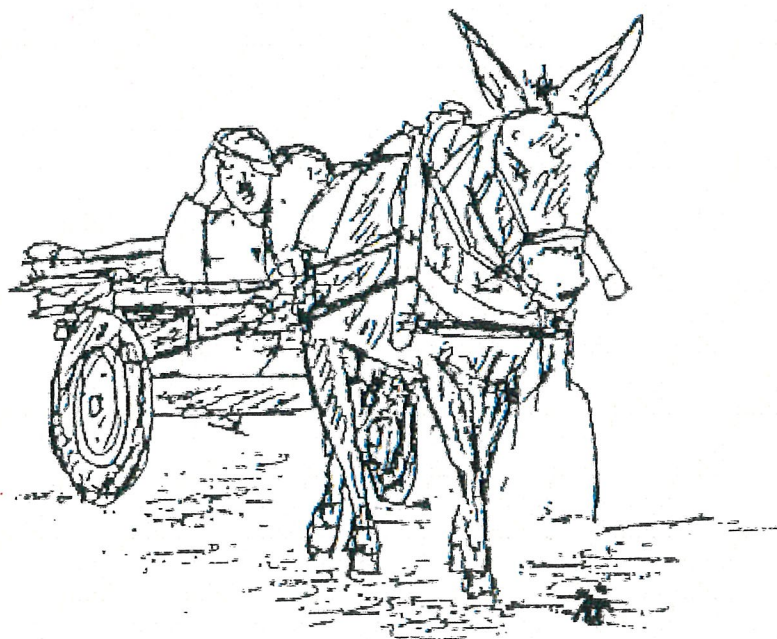
私は家の夢をみていた。はっと気がつくとき夏の太陽が私達の山頂を強烈に照らしている。井口は傍で高いびき。ゆすつても起きそうにない。十一時から二時間もここにいたわけで一時半になっていた。先がながいので無理に井口を起こす。井口は、渋い顔をしてやっと目をさます。水を補給し出発。今夜の宿りのことを考え考え歩き、水場なかったりしたらどうしようと思つたりした。結局はと勞に終り良いビバークサイトをみつけ二人で喜ぶ。ビバーク地は清水峠小屋より五十メートルばかり上の方である。三時であつたが早めに食事の支度をする。私がカマドを築く間に井口は薪を集める。カマドができたので米をとぎ飯をたく。副食には、みそしる、牛肉のカンヅメ、ソーセイジ、りんご、みかんのカンヅメと私達の最高の食べ物であつた。二人で大いにくい、五時頃セーターとズボンとを二枚にし、グラントシートを敷き、ツエルトをひつかぶりねこんでしまった。一度目がさめたら八時

で夜空に星がふるようであつた。

翌朝四時半出発。やはり快晴にめぐまれ、ヨモギ峠、武能岳、茂倉岳、一の倉岳、谷川岳を縦走し土合にくだり帰京した。二人ともかなりバテたが無事に完全縦走の喜びにひたつたのは言うまでもない。

一九五九年八月 記

〔編者注〕 本稿の「谷川連峰縦走記」はほぼ原文のまま掲載しました。大倉山を笠ヶ岳、笠ヶ岳を朝日岳と読み替えると辻褄が合います。



西本武志（にしもと たけし）
一九四〇年六月、東京都練馬区生まれ。八五歳。日本山岳文化学会名誉会員。